

第21回「日本体験コンテスト in 大韓民国」 実施報告

2018年7月14日
第21回日本体験コンテスト in 大韓民国
実行副委員長 金正萬

1. 総評

「第21回日本体験コンテスト in 大韓民国」が7月14日(土)10:00にソウルロッテホテル36階のパークリー・ホールで、開催されました。

今年も「学術・研究体験部門」日本の大学院で学術研究体験と、「職業体験部門」日本の企業で働いてみる体験というテーマで、体験希望学生の募集をしました。

一次審査の書類審査通過者10人の発表は、Seoul事務所ホームページにて7月3日掲載しました。二次審査の面接は、7月14日10:00~からの面接を経て入賞者は、学術・研究体験部門が3人、職業体験部門が7人の計10人の企画が選抜されました。

学術・研究体験部門では日本の「自動車産業に関する研究」、「日本語についての深層的な研究」、「言語のソフトウェアに関連する研究」のテーマが選出されました。

職業体験部門では、「社会的企業としての旅行業分野」、「日本で韓国語の勉強ができる韓国語学校の職業体験」という、昨年より広い視野からのテーマが目立ち、審査員の関心を集めました。

面接審査後の授与式では学術体験部門の3人、職業体験部門の7人の入賞者に、夢・体験賞として一人当たり300万ウォンの賞金が授与されました。

入賞者は2019年3月1日まで日本体験を完了し、その体験日誌と報告書を3月8日まで提出します。その実施報告書は、当財団のホームページに掲載および当財団刊行のアジア文流で紹介する予定です。

懇談会では黒田勝弘審査委員長と李康民審査委員、本行事の後援会社であるANAソウル支店長、大和田哲也様とお茶をのみながら懇談を行い、日本体験のために必要な心構えや、助言を頂きました。

このコンテストを通して韓国の多くの若者に、日本への進学、就職の進路を決定する際の選択する機会にしてほしいと願います。

そして、さらに本人の成長ばかりでなく、日本と韓国との関係を発展させることができる力量を持った、大切な人材に成長してくれることを期待しています。

2. 実施内容

- 日 時：2018年7月14日(土) 11:00~15:00 (面接・表彰式)
- 場 所：韓国ソウルロッテホテル36階パークリー・ホール
- 審査委員：黒田 勝弘 産経新聞ソウル駐在特別記者
李 康民 韓国 漢陽大学校 日本言語文化学部 教授
菊川 長徳 日本 国士舘大学 21世紀アジア学部 教授
- 主 催：一般財団法人 共立国際交流奨学財団ソウル事務所
- 後 援：文部科学省、在大韓民国日本国大使館
東亜日報、全日本空輸株式会社ソウル支店
- 協 賛：株式会社 共立メンテナンス

①<<面接の様子>>



②<<懇談会の様子>>



③<<表彰式の様子>>



3. 入賞者 10名と体験先



後列左より、入賞者

オ	ジンタク	ソ	ソヒョン	シン	ウンヘ	ベク	スンヒョ	コ	デヨン
クオン	ジェイン	イ	ジョンソク	イ	ウィジン	パク	ミジョ	コ	ヒョンギョン
権	在仁	李	鍾碩	李	義振	朴	帽操	高	賢 暲
李	康民氏	菊川	長徳	理事長	黒田	勝弘氏	大和田	哲也氏	
	(審査委員)		(実行委員長/審査委員)			(審査委員長)		(ANA ソウル支店長)	

《職業体験部門7名》

氏名	所属大学	体験企業先
クオン ジェイン 権 在仁	カトリック大学校	(株)フューチャー・デザイン・ラボ
バク ミジョ 朴 岬操	祥明大学校	(株)共立メンテナンス
バク スンヒョ 白 承暁	カトリック大学校	(株)共立メンテナンス
コ デヨン 高 大永	南ソウル大学校	株式会社ジャコネットモバイルサービス
コ ヒョンギョン 高 賢暻	梨花女子大学校	(株)COCOA
イ ジョンソク 李 鍾碩	慶北大学校	ソウルメイト韓国語学校
イ ウィジン 李 義振	又石大学校	株式会社 Ridilover

《学術・研究体験部門3名》

氏名	所属大学	研究体験大学先と企画テーマ
オ シンタク 呉 進鐸	ソウル科学技術大学校	北海道大学：車両の空気力学的特性に関する研究
シン ウンヘ 辛 恩慧	漢陽大学大学院	神戸大学：語彙研究（コーパス・統計学の関連資料）
ソ ソヒョン 蘇 庶炫	漢陽大学大学院	豊橋技術大学：日本語語彙の調査研究

4. 審査委員講評

◆審査委員長 黒田 勝弘（産経新聞ソウル駐在特別記者）



「日本は広くやれることは多い」

韓国での「日本体験コンテスト」は、昨年からの新しい試みとして単なる旅行体験ではなく、大学などでの「研究体験」と企業での「職場体験」に分けてより実質的な日本体験コンテストとして募集が行われている。ただ体験期間が数週間と短いため、受け入れ先との調整などに限界もあり、応募者に多少広がりや欠く結果になった。それでも研究体験3人、職場体験7人を選抜することができ、韓国の若者の日本体験への熱い思いを感じることができた。

大学での研究体験では北海道から愛知県豊橋、神戸と幅広い地域での選択が見られ、頼もしかった。日本の学術研究は韓国の場合と違って、必ずしも首都・東京の大学だけが水準が高いわけではない。北の北海道から南の九州まで、各地の大学で独自かつ水準の高い研究が行われており、ノーベル賞授賞者においてはむしろ京都や名古屋を含め、東京以外での研究者が多数を占めている。

「日本体験」という意味では日本の地方を知ることが重要である。日本はアジアでは異例の、地方分権や独自の地方文化が発達した国家構造を持っている。そこで「地方力」という言葉さえあるのだが、韓国を含めアジアの皆さんには日本における「地方の良さ」をもっと知ってもらいたいと思う。

職場体験では、やはり期間の短さなどから職場が限られてしまった感じがあるのは少し残念である。「日本体験」としての「職場」という意味では、もっと“物作り”の現場を選択してもらえればよかったと思う。日本には地方を含め世界的にも評価の高い“物作り”の職場が無数にあり、そうした職場は外国人の進出を期待している。

昔、韓国の財閥「大宇」の創業者・金宇中氏は「世界は広くやることは多い」と語ったが「日本も広くやれることは多い」のだ。

◆審査委員 李 康民（漢陽大学校 日本語・文化学科教授）



2018年7月14日(土)、第21回「日本体験コンテスト in 大韓民国」の二次面接がソウルのロッテホテルで行われました。一次の書類審査を通過した10人の応募者を二つのグループに分け、日本語の面接を行い、最終的に入賞者を決める方式ですが、今回は、結果的に10人全員が入賞者として採用されました。

二次面接で脱落者が出なかったのは非常に稀なことですが、おかげで和やかな雰囲気審査ができ、ほっとしております。

さて、今回の「日本体験」は、最近の韓国社会の就職難が反映されたのでしょうか、学術・研究部門より職業体験部門に応募した人が多く、日本企業に向けた熱い視線を感じることができました。特に、今回の応募者の中には、日本企業に就職する前に、日本の組織文化を学びたいという姿勢をもっている人が幾人もいたことは強く印象に残っています。

また、この他にも、東京で韓国語教師を目指している青年、日本のベンチャー企業のアイデアを韓国に導入し、自分の事業を立ち上げたく日本に渡る男子大生、中国語をマスターしてから日本語に挑戦しようとする女子大生、学術・研究部門においても、具体的な研究計画をもち、それぞれ北海道大学、神戸大学、豊橋技術科学大学へ出かけていく皆さんの姿から、目に見えないところで日本との接触面を持ち続けている多くの若者が韓国には存在するという事実を改めて確認致しました。

なお、今回の入賞者の地域分布は、首都圏の他にそれぞれ大邱、全州、天安の居住者がおり、また性比においても、5:5といったような、偶然とはいえ、大変いい形で収まっていることも付け加えておきたいと思います。ともあれ、今回の入賞者の皆様、是非今回の貴重な機会を活かし、実り多い体験の成果を得られるよう心からお祈り致します。